

内科医 つれづれ草

高山浩一

当院では、定期的に肺がんの患者さんとそのご家族との勉強会を開催しています。前任地で始めてから10年以上になりま

重要なコミュニケーション

ながら詳細に説明するのを、私もそばで聞いていました。理由の一つは主治医が誤った説明をしていないかの確認です。実際に主治医が話す内容は肺がんの解説文としてそのまま使えそうなくらい正確なものでした。

話し合い相互理解を

とに、若い主治医は患者さんが理解していないことに気付いていないことがあります。病状説明を終えて、患者さん



イラスト・山本重也

が退室された後、主治医の顔にはひと仕事終えたという表情が見て取れます。若い内科医が一人で病状説明できるように成長の証でしょう。そこで、おもむろに私が「患者さんは分かっているよ」と伝えて、少々不服そうな主治医に再度の説明を命じるようになります。

小さなコミュニケーションエラーは場合によっては大きな医療不信につながります。結果的にそれは患者、主治医の双方にとって不幸なことです。エラーを少なくするにはどうするか。何度も話し合うより他に方法はないと私は思います。主治医は平易な言葉で説明し、患者さん自身も分からないことを率直に質問していただくことで、初めて良好な相互理解が得られます。

当時の病棟での風景を思い出しながら、勉強会では患者さんの質問に耳を傾けます。それは私自身のコミュニケーションの技術を磨く最良の方法であると信じているからです。

(京都府立医科大学教授)